



(公財) 山階鳥類研究所
〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
電話：04-7182-1101 FAX：04-7182-1106
<http://www.yamashina.or.jp>



「世界アルバトロスデー」(6月19日、※1)にあわせてお知らせします

アホウドリ新繁殖地形成事業による小笠原諸島聳島での人工飼育個体のつがいから5年連続でヒナが孵化しました このつがいから巣立った最初の1羽に続いて2羽めも成長して聳島に帰還しました

小笠原^{むこしま}諸島聳島におけるアホウドリの新繁殖地形成事業※2において、東京都小笠原支庁からの委託で山階鳥類研究所が実施している調査の結果、

- ・ 2016年以來繁殖に成功しているつがい(2008年に聳島を巣立った人工飼育個体と野生個体)が、今年も産卵・孵化に成功し、ヒナが順調に発育しているのが確認されました。聳島でのヒナ誕生が確認されたのは5年連続5例目です。
- ・ このつがいから巣立った2羽めの子(2017年5月巣立ち)が成長して聳島に帰還したことが2020年3月6日に観察されました。また、1羽めの子(2016年5月に巣立ち、性別不明)は、昨シーズンの2019年2月12日に帰還したことが確認されていましたが、今シーズンも2020年1～3月に観察されました。
- ・ 上記のつがいに加えて、今シーズンは聳島で新たに、2010年に聳島を巣立った人工飼育個体と別の野生個体の間に、孵化はしなかったものの、産卵があったことが分かりました。

※1 世界アルバトロスデー(6月19日、World Albatross Day; アルバトロス＝アホウドリ)についてはこの資料の末尾の<参考>をご覧ください。

※2 この事業は、小笠原群島聳島にアホウドリの新しい繁殖地を形成する目的で、伊豆諸島鳥島で生まれたアホウドリのヒナを聳島に移送(2008～2012年)して人工飼育により巣立たせ、その後の動向を継続してモニタリングしているものです。(公財)山階鳥類研究所が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金等の支援を得て実施しています。



世界アルバトロスデー

1. 繁殖に成功した親とそのヒナ(写真1、2、3)

オス親は2008年に人工飼育し巣立った個体(カラーリング番号:赤Y01、12歳)
メス親は野生個体(足環なし)。

2. 他に産卵したつがい(写真3、4)

メスは2010年に人工飼育し、巣立った個体(カラーリング番号:赤Y31、10歳)、

オスは野生個体（足環なし）。

3. 上記 1. のつがいの子で聳島への帰還が確認された個体（写真 5、6）

- このつがいから巣立った 2 羽目の個体(写真 5、カラーリング番号: 赤 Y76、3 歳、オス)
- このつがいが初めて繁殖に成功した 2016 年に生まれ巣立った個体（写真 6、カラーリング番号: 赤 Y75、4 歳、性別不明）

4. 繁殖及び飛来を確認した場所

上記 1、2 の両つがいとも聳島北西部の新繁殖地での繁殖が確認されました。Y01 はこの場所で、2012 年から 8 シーズン連続して足環なし個体との間で産卵が確認されており、2016 年より繁殖に成功するようになりました。



5. 確認の状況

Y01 と足環なしのつがいは、2019 年 11 月の調査において抱卵行動が、1 月とその後の調査では、ヒナの孵化や親鳥による給餌などが確認されました。3 月には順調に成長している様子が確認され、足環の装着を行いました（左足：カラーリング番号：赤 Y79、右足：環境省の金属リング）。この個体は、羽毛サンプルを用いた性判定の結果、メスであることが分かりました。

また、Y31 と足環なしのつがいは、Y01 つがいの営巣場所のすぐ近くで 11 月 11 日から営巣、抱卵する様子が見られましたが、約 1 か月後に放棄してしまったことが確認されました。3 月の足環装着時に営巣場所を確認したところ、卵はなく、細かい卵殻が残っているのみでした。

Y76 は、2020 年 3 月に巣立ち後 3 年で初めて帰還が確認され、繁殖地を歩き回ったり、他個体の近くで休息するなどの行動が観察されました。

Y75 は、昨年繁殖シーズンである 2019 年 2 月 12 日に初めて帰還したことが確認され（当時 3 歳）、今シーズンも 1 月から 3 月まで飛来し、営巣場所近くで他の個体と求愛行動をしたり、休息したりする姿が観察されました。

6. その他の個体

小笠原で自然に孵化し巣立った個体が帰還したのは、上記のほかに、2014 年 5 月に媒島で巣立った個体（カラーリング番号：緑 M170、6 歳、メス）が 2017 年 3 月

に聳島で観察されています。この個体は、今シーズンの調査では確認されませんでした。

また、2017年、2018年と2年連続で聳島で産卵した、2009年生まれの人工飼育個体（カラーリング番号：赤 Y11、メス）は、2019～20年の繁殖期には繁殖しませんでした。



写真1. アホウドリのヒナから餌乞いをされるメス親（足環なし）（2020年1月12日）



写真2. アホウドリのヒナ(2020年3月6日)



写真3. 2019-20年シーズンに営巣確認された2つがいのアホウドリ
(左から、Y01、足環なしメス、Y31、足環なしオス;2019年11月12日)



写真 4. 今年新たに営巣が確認された足環なしオス（左）と Y31 つがい
(2019 年 11 月 11 日)



写真 5. 初めて帰還が確認された Y76 と妹である今年生まれたアホウドリのヒナ（Y79）
(2020 年 3 月 8 日)



写真6. 昨年に続き帰還が確認された Y75 (左) と Y11 (2020年1月13日)

* 写真の撮影は山階鳥類研究所

聳島及び聳島列島の島におけるこれまでのアホウドリの繁殖状況

*アホウドリは11月に産卵し、ヒナは翌年1月に孵化して、5月巣立つため、繁殖は年をまたぐ

	聳島	媒島 (聳島から7km南)	嫁島 (聳島から22km南)
2012-13年	1卵(孵化せず)		
2013-14年	1卵(孵化せず)	1ヒナ巣立ち	
2014-15年	1卵(孵化せず)	1卵(孵化せず)	
2015-16年	1ヒナ巣立ち		1ヒナ巣立ち
2016-17年	1ヒナ巣立ち		
2017-18年	1ヒナ巣立ち + 1卵(孵化せず)		
2018-19年	1ヒナ巣立ち + 1卵(孵化せず)		
2019-20年	1ヒナ孵化 + 1巣(途中で放棄)		

この件についての問い合わせ先

※写真のデジタルデータをご希望の方もお問い合わせください。

油田照秋 山階鳥類研究所保全研究室研究員

eメール：yuta@yamashina.or.jp

電話：04-7182-1107、Fax：04-7182-4342

平岡考 山階鳥類研究所広報コミュニケーションディレクター

電話：04-7182-1101、Fax：04-7182-1106

eメール：hiraoka@yamashina.or.jp

<参考>

アホウドリ (*Phoebastria albatrus*)

ミズナギドリ目アホウドリ科

特別天然記念物、国内希少野生動植物種（種の保存法、1993年指定）、
絶滅危惧Ⅱ類（環境省レッドリスト 2019）

分布及び個体数

- ・ 繁殖地は、日本の伊豆諸島鳥島と尖閣諸島
- ・ 非繁殖期には、北太平洋のベーリング海やアリューシャン列島、アラスカ沿岸まで移動する。
- ・ 1949年の調査で一度絶滅したと考えられたが、1951年に約10羽が鳥島で再発見された。1971年には尖閣諸島で少数の生息が再発見された。
- ・ 減少原因は、1890～1900年代に羽毛採取のために大量に捕獲されたことによる。
- ・ 保全活動の成果などもあり、現在個体数は約6,000羽（尖閣個体群は除く）まで回復したと推定されている。

形態及び生態

- ・ 成鳥は全長が84～94cm。
- ・ 成鳥は全体に白く、風切羽や尾羽が黒い。頭部は淡黄色。ヒナから2歳ごろまでの若鳥は全身黒褐色で、成鳥羽になるまでは7～15年ほどかかる。
- ・ 繁殖期は10月～翌年5月。
- ・ 巣立ち後3～4年で巣立った場所に帰ってくる。5歳前後から繁殖に参加するが、巣立った場所で繁殖を行う傾向が強い。

アホウドリの小笠原再導入

現在、アホウドリのふたつの繁殖地のうち、伊豆諸島鳥島は活火山であり、万一噴火があった場合には、アホウドリの個体群に大きな影響が出る可能性がある。もうひとつの繁殖地である尖閣諸島は、繁殖状況の調査や保護活動を行うのが難しい現状である。このため、過去にアホウドリが繁殖していたことが知られている場所から、1カ所を選んで、アホウドリの営巣地を復活させることで、本種の復活を一層確実にすることが望ましいと考えられた。このために山階鳥類研究所では、生まれた場所に戻って繁殖する同種の習性を利用して、ヒナの移送により小笠原群島聳島に繁殖地を作ることとした。2008年から2012年の5年間に合計70羽のアホウドリのヒナを鳥島から聳島に移送して人工飼育し、69羽を巣立たせた。聳島の飼育地には2009年から野生のアホウドリの飛来が観察されるようになり、2011年からは人工飼育した個体の帰還が認められた。2012年11月14日には、2008年に巣立ちした人工飼育個体（カラーリング番号Y01、オス）と野生個体（足環なし、メス）の間に初めて産卵が確認され、2016年には、同ペアから初めて巣立ち雛が確認された。

なお2014年5月に、聳島から約5キロ南の媒島（なこうどじま）において、人工飼育個体（2009年巣立ち、カラーリング番号Y11、メス）と鳥島で生まれた年齢不詳のオスとの間で1羽の雛が誕生したことが確認されている。また2016年5月には聳島から約22キロ南の嫁島（よめじま）で雛1羽が確認されている。この雛の親鳥は不明だが、山階鳥研がこの事業で人工飼育して巣立たせた個体、あるいは同事業で誘引された個体と推察されている。

この事業は、（公財）山階鳥類研究所が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金等の支援を得て実施している。

世界アルバトロスデー

「アルバトロス」はアホウドリのこと。アホウドリ類・ミズナギドリ類の繁殖地を擁する 13 カ国が加盟した「アホウドリ類とミズナギドリ類の保全に関する協定 (ACAP; Agreement on the Conservation of Albatrosses and Petrels; 未加盟の日本からは研究者や保護団体関係者がオブザーバーとして参加しています) が 6 月 19 日と定めて 2020 年から開始したもので、世界の海洋を生息地とするアホウドリ類が、漁業による混獲や海洋汚染などの人間活動由来の原因によって危機にさらされていることから、国際的な協力を必要とするこの仲間の保全について普及啓発することを目的としています。今年の世界アルバトロスデーのテーマとして「有害外来生物の根絶」が掲げられています。世界各地の離島にある繁殖地で、人為的に移入されたネズミ類、ノネコ、半野生のブタなどによってアホウドリ類の繁殖と生存が脅かされているためです。世界アルバトロスデーは日本でも実行委員会 (<https://albatrossday.org/>) が組織されており、山階鳥類研究所も実行委員として参加しています。

(以上)